

本論文は、序文においてピアジェの認識発達理論を中心に発展してきた発達心理学の流れの中で、本研究に取り組んだ経緯を述べ、第1章において母子相互作用研究の歴史的背景や母子の能力に関する知見について内外の文献を整理した総説を記した。

第2章においては、乳児における児と母親との相互作用についての研究を報告し、乳児期早期（2か月）からの母子の観察から、「やりとり開始が児か母親かによる、やりとりの比較とその発達」「やりとりにおける母親の言葉かけと児の発達に伴う変化」「やりとりにおける児の働きかけの発達の变化」を検討して考察した。本研究では、①乳児の働きかけに母親が応答することが、やりとり成立につながる可能性が高いことが示唆された。これまでに、幼児期前期での母親と物を介する注意共有場面において幼児の働きかけに対する母親の応答の役割の重要性を指摘する報告はあったが、乳児期における母子相互作用においても一致する結果となった。②母子のやりとりにおいて、母親の発話内容は児の発達に応じた変化があり、また、児を受容・肯定する発話内容が多く、母親は発話の内容からも児の要求や関心に沿った関わりをしようとしていることが推測された。③生後2～3か月頃は、児の働きかけの意図が分かりにくい状況にあるなかで、母親が児の行為を意味づけし、解釈して関わりをもととする時期であることが示唆された。生後4か月以降には母親が場から離れる又は児に対応していない状況を見が嫌がるものが伝わりやすくなり、生後9か月を過ぎると、「母親の存在を求める」以外にも児の働きかけに児の意図や意志を母親が明確に感じていることが示唆された。このように乳児からの働きかけは、児の社会性の発達の過程に沿って、働きかけのあり様も変化していくと考えられた。

第3章においては、幼児期前期における児と母親、保育者、仲間との相互作用についての研究を報告し、「幼児期前期の母子の注意共有場面におけるやりとり」「幼児期前期における保育者と仲間との共同注意の形態」「幼児期前期における仲間と物による三項関係」を検討して考察した。①母親とのモノを介する場面においては、母親は児の言語発達に応じて、自分の子どもへの行動や発話内容を変化させていることが示唆された。母親の子どもへの発声や行動に同調し、意味づける発話内容は一貫しており、これはブルナーの「役割引き渡しの原理・handover principle」を可能にしているものと推測された。②保育者や仲間とのモノを介する場面においては、これまでの「自己ーモノー他者」という三項関係に要素を追加する形で、複数他者間での共同注意の推測される形態を提示した。児と保育者、仲間というように、複数他者との相互作用には多様な形態があると考えられ、このような多様な相互作用の形態があることが重要なのであろうと考えられた。仲間とのモノを介する「三項関係」における共同注意場面においては、物自体に関心があるというよりも、「仲間が使っている物」に関心をもつことを示しているのであろうと考えられた。

以上の研究を通して明らかとなったことは、母子いずれにも個人差のあることであった。子どもへの母親の発話内容や行動には個人差がみられ、母親によって発話内容の種類が多い人と少ない人がいた。また母親の働きかけに対する乳児の応答（反応）割合にも個人差がみられた。個人差のあることは当然とはいえ、このような乳児期早期からの詳細な観察を複数例について継続的に行ったことによって明らかにできたといえる。子どもの言語発達においては多様な言語環境にあることが重要なのであろうと考えられ、言語や行動発達の著しい幼児期前期には複数他者との関わりの中で育つことも必要であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

齊藤多江子は、青山学院大学大学院において庄司順一教授（故人）の指導の下で乳幼児の発達心理学、母子相互作用の研究を積み、現場の経験も持った後、高崎健康福祉大学短期大学部の教員として学生の教育、実習に当たってきている。またこれまでに、著書（分担執筆）5、学術論文18（大学紀要を含む、内単著7）がある。

論文審査に当たっては、本人の研究歴および論文内容についての発表を受けた後、論文内容及び論文に関連する発達心理学、福祉教育等の専門知識に関わる質疑応答を、多くの英文資料の内容を含めて行った。これらにより、本人の学力が十分であることを認めた。

本論文は、研究成果として、①生後2か月の乳児期早期からの母子相互作用の過程を、構造的、機能的に明らかにしたこと ②社会文化的文脈のもとで、児と母親、保育者、仲間との相互作用について明らかにしたこと ③母子相互作用の成立や変容過程における個人差に迫ったこと ④方法論の新たな開発を図ったこと が挙げられ、発達心理学の立場から、母子相互作用についての新知見を報告したものであって、育児支援に関わる健康福祉の分野に貢献するところが大きい。

本論文は、乳幼児期における母子関係をビデオカメラによる録画と録音を継続的に行い詳細に分析するという新しい手法で研究したこと、生後2か月の乳児期早期から幼児期にわたる観察研究は内外ともに初めてであること、観察に長時間を要する研究方法であるため、3例以上の観察はこれまでになく、7例にわたる報告は初めてであること、そのため個人差の判断が可能であったこと、が特記できる。

以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。